

青少年信徒への願い

青少年信徒の信行相続の後押しのために、平成十九年に始まった宗門の「青少年の一座」が、五月二十三日に執行されました。今回は新型コロナウイルスが世界中に猛威を振るう中、何度も日程や内容が変更され、最終的に本山の御宝前ごほうぜんと世界の青少年信徒をオンラインで繋ぐ奉修という、実に歴史的な大会となりました。私はこの企画の担当部署の責任者として、実行委員会のトークセッションを受けたコメントを求められました。以下、原稿の抜粋を掲載します。

「今回の法要は、《御題目口唱の中から、ご信心のつか喜びを掴む》というコンセプトでスタートしましたが、当初より《本山で青少年による一万遍の口唱会くしょうかいなど出来るのか》《そんな企画で今の若い子たちが喜ぶのか》といった心配の声がたくさんありました。私が青年会の皆さんと一緒に、第一線に立ってご奉公させていただいたのは、今から三十年から四十年ほど前になります。二十代の前半は東京の乗泉寺じょうせんじの青年会の方たちと毎月口唱会を重ね、遂に当時の青年会員は誰も経験したことがなかった十時間口唱会をしようという企画が生まれました。本堂は初めて十時間に挑戦する若人で溢れ、《トイレに立つと十時間にならない》と、座りっぱなしで頑張る人たちもいて、このお看経あふの体験が、それぞれのご奉公の大きな力になっていくのを、見せていただきました。二十代の後半は大阪の清風寺でご奉公させていただきましたが、当時の青年会はお寺の立教開宗記念日や龍口法難記念日の終日口唱会を中心になって盛り上げ、独自に二十四時間の口唱会も行っていました。他の会員と競い合うようなお看経がご信心のパワーの源で、それが活発な活動を生み出していたと思います。それぞれ、皆さんのご両親より上の世代の方たちのご奉公になるかも知れません。しかし、これは昔話ではありません。この青少年の一座が始まった平成十九年も、実行委員さんを中心に、本山の本堂で二十四時間の口唱会が行われました。最近、拝見をした九州の信行体験談の中には、若い青少年も百本祈願に挑戦し、ご利益をいただける話が結構あって、深く随喜をいたしました。こうした、若い皆さんの《柔軟な感性》が、口唱を通じてご信心を掴んでいくことを、あまりご存知ない方たちが《今の若い子がお看経でご信心を学ぶなんて無理だ》と心配をされたのは残念ですが、しかし、今回の実行委員会の皆さんは、《今はお寺の外に、楽しいことはいくらでもある。お寺は、お看経の有難さを体験する場にすべきだ》という考えを最後まで貫きました。私たちは、そのことを有難く、また頼もしく思い、今回の企画を支援させていただきました。残念ながら、今日は皆さんが本山の本堂に大集合して、隣の人熱気を感じながらお看経をさせていただくことは叶かないませんでしたが、今日を一つの出発点として、布教区で、そして各寺院で、お看経の素晴らしさを皆で感じていくご奉公が始まることを祈ります」

コロナ禍の影響か、この企画に取り組む姿勢に差が出たのは残念でしたが、育成の基本は時代を問わないことが伝わればと願います。

(松風寺月報 令和3年6月号)